

インターネットを使った異文化国際交流における多様性教育の検証と考察 —アジアの国との交流を通じて 日本の子どもたちの学習意欲は変わったのか—

炭村 紀子

Verification and Consideration of Diversity Education in Intercultural International Exchange Using the Internet, Through Exchange with Asian Countries Did Japanese Children's Willingness to Learn Change?

SUMIMURA, Noriko

本稿は、2017 年度大阪府三島郡島本町第一小学校とインドネシアのジャカルタ SDN Mentang 01 小学校の 5 年生同士と同じ学校同士で別日に 6 年生同士、そして同じ年度に島本町立第四小学校と台湾台南市善化國民小學の 5 年生同士が Skype を用いた同時刻の国際交流授業を行った。それら授業の終了後日本の児童 71 名のアンケート結果から、本取り組みによって子どもたちが異文化への関心を示し、英語科としてだけでなく、文化などに関しても学習意欲につながるかを ICT 支援員の視座において検証し考察する。

インターネット：多様性教育，国際交流，異文化理解，外国語，伝統，双方向通信，ビデオ通話

1. はじめに

今回の大阪府三島郡にある小学校における国際交流は、沖縄県恩納村教育委員会および NPO 法人スプラタルカの仲介協力でアジア諸国の小学校と行うことができた。今という時間をビデオ通話によって、お互いが英語で会話することで得られる感動から、英語教育だけでなく相手のことを知ることでの異文化教育、自身の国のことを伝えるために事前に準備することで日本の伝統を学ぶ社会科教育にも意欲をもって意欲を持って取り組めたかをアンケートをとり検証した。

この取り組みは 2016 年から継続して行っており今後の課題などにおいても考察していく。

2. 小学校での外国語教育の現状

小学校の英語教育は、2008 年度から始まり、2011 年度には 5・6 年生に必修化、2020 年度には 3・4 年生必修化、5 年生からの教科化される。外国語活動では英語嫌いを生み出さないことを理念としている（文部科学省、2004 年）が、英語活動が必修化された 5・6 年生に英語嫌いの児童が相当数いることが明らかになっており（横石、2012）、横石は英語活動に対して「低意欲・高

不安」になっている子どもが、5・6学年においてそれぞれ38%存在していたと述べている。

また、吉田（2009）は中学校入学時に「英語が好き」であり、「中学校で英語を学ぶことが楽しみ」な生徒が50%にも達していないことから、小学校時代の英語の学習内容が影響している可能性が高いと述べている。

3. 研究の目的

本研究の第一目的は、英語教育だけにとどまらず、インターネットを使った国際交流を通じて、同時刻にお互いがビデオで会話し、英語を会話し通じあうことによって感動や喜びを伴った体験が、他国への関心度や興味付けを生み、異文化へ理解、自国のことを伝えるための伝統文化への学びなどにつながることに関心度が高まり、しいては英語や英会話への向学心や学ぶ意欲への向上へとつながるのではないかと検証を行った。

下記 NPO 法人 Supratarka（2017）の理念として下記の5つの方針を記載する。

3.1.1 ビデオ通話（Video Communication System）の可能性

高速インターネット通信・パソコン・プロジェクタなどの基本的 ICT 環境が整っていれば、ビデオ通話によるコミュニケーションが可能である。この仕組みを活用することで、地球上のどの地域に住む子供たちでも、特別の経費をかけることなく直接交流することができる。

ビデオ通話は映像によるコミュニケーションなので、より現実に近い直観的な交流が可能であり、また、お互い現実の時間を共有するリアルタイムのコミュニケーションでもある。

3.1.2 同世代による相互理解

世界中の同世代の子供同士が、直接コミュニケーションをとることができる。お互いの文化や歴史や日常を紹介し、また意見交換することで、誤解や偏見の解消につながる。次世代を担う子供たちが、お互いを理解することの価値は計り知れない。無用な誤解をなくし信頼を築くことで、将来のビジネスパートナーともなり得る。

3.1.3 対等なコミュニケーション

特別な経費がかからないので、いずれの国や地域の子供たちも対等な立場で参加することができる。

3.1.4 誰にでもチャンスがある

特別な経費がかからないので、選ばれた者に限らず誰にでも交流の機会を提供することができる。

3.1.5 学校をつなぐ信頼あるネットワークの構築

国や地域を超えた学校間で交流を行うには、お互いの信頼関係が前提となる。このような、学校同士が安心して交流を行えるためのネットワークの構築が使命である。

3.1.6 世界の平和に向けて

国や地域を超えた子供たちの相互理解が、世界の平和構築の新たな力となることが期待できる。

4. 国際交流後の児童に対する質問紙調査の結果

4.1 小学5年生2クラス71名、無記名による調査

提出されたアンケート71本から得られた355件の中心発問を分析対象とした。「KH Coder」

を用いて前処理を実行した結果, 342 の段落, 379 の文が確認された。また, 総抽出語数は 5,132 語, 異なり語数 (何種類の語が含まれていたかを示す数) は 531 語であった。さらに, 助詞や助動詞など一般的な語が除外され, 分析対象となる頻出語として 1,156 語が抽出された。これら頻出語のうち 5 項目の品詞各上位 10 語とその出現頻度を示したものが〈図 1〉である。中心発問における頻出語 (5 項目の品詞各上位 10 位) である。「楽しい」(111 回), 「英語」(86 回), 「相手」(49 回), 「交流」(43 回), 「面白い」(39 回), 「知る」(35 回), 「話す」(31 回), 「話せる」(26 回) と出現回数が突出しており, 以下, 「外国」(26 回), 「違う」(20 回), 「言葉」(19 回), 「知れる」(19 回) など上位 20 位は 111~10 回の範囲で出現が確認された。

順位	名詞		サ変名詞		形容動詞		動詞		形容詞	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	英語	86	交流	43	いろいろ	11	思う	84	楽しい	111
2	相手	49	経験	10	元気	3	知る	35	面白い	39
3	外国	26	授業	8	好き	3	話す	31	良い	10
4	言葉	19	会話	6	ふしぎ	2	話せる	26	明るい	4
5	国際	15	給食	5	上手	2	違う	20	興味深い	3
6	自分	15	発音	5	不思議	2	知れる	19	広い	3
7	学校	11	話	5	あたりまえ	1	学ぶ	10	多い	2
8	興味	7	勉強	4	スムーズ	1	通じる	8	暗い	1
9	友達	7	ダンス	2	重要	1	言う	7	強い	1
	世界	6	学習	2	大事	1	学べる	6	上手い	1

図 1. アンケート結果による頻出語 (上位 10 位)

5. 語の共起関係の探索と自由記述の要約

KH Coder の「共起ネットワーク」のコマンドを用い,

Q1: また国際交流をしたいですか (来年や, 中学生になっても)

Q2: 今回の国際交流授業を通して, もっと英語を学びたいと思いませんか

Q3: 相手の国のことは, あなたにとって興味深いものでしたか

Q4: 違う国の相手とつながることをあなたはどう感じますか

Q5: その他なんでも感想があればかいてください

の質問に対する自由記述それぞれの中で, 出現パターンの似通った語 (すなわち共起の程度が強い語) を線で結んだネットワークを描いた (図 1 及び 2)。なお, 分析にあたっては, 出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を 5 に設定し, 描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を 60 に設定した。

5.1 Q1: また国際交流をしたいですか (来年や, 中学生になっても)

図 3 及び図 4 は, Q1 の来年や, 中学生になってもまた国際交流をしたいですかに対する, 分析結果を示したものである。

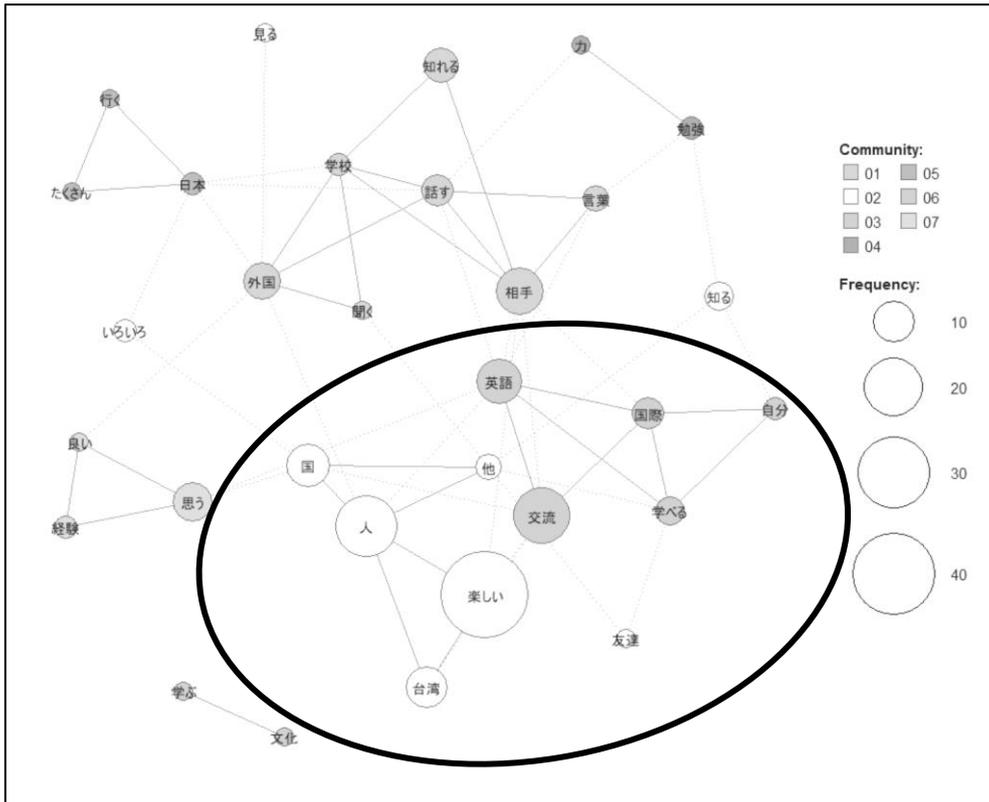


図2. 共起ネットワーク (サブグラフ)

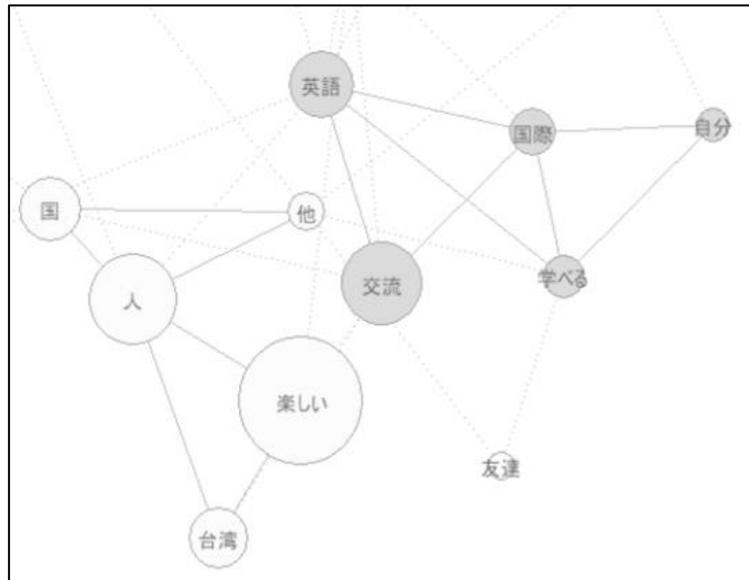


図3. 共起ネットワーク (サブグラフ) 拡大図

図3及び4では、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。また、語 (node) の色分けは「媒介中心性」(それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す) によるものであり、白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示す。以下では、図2及び図3に示した語の共起関係をもとに、分析者が特

徹的な記述のまとめりと判断したものを項目として立て、子どもたちの実際の記述を“ ”内に原文のまま抜粋しつつ、書き方が違う、例えばおもしろいと面白いは漢字の方に統一した。分析結果から、国際交流によって英語を学ぶことに興味関心が増えたという表記が多く、「台湾という国のことを知ることが出来て良かった」、「台湾の人と交流できて、実際にも会ってみたい」などという表記もあった。

5.2 Q1 から Q5 まですべての語を分析



図4. 共起ネットワーク (サブグラフ) 拡大図

上記共起ネットワークの図4から、出現言語のまとめりを下記にまとめると、A群が「楽しい・相手・思う・知る・知れる・学校・いろいろ」、B群が「面白い・違う・言葉・自分・通じる・言う」、C群が「英語・話せる・話す・外国・学ぶ」、D群が「世界・話・文化・今日・聞く・興味・英会話」、E群が「交流・授業・国際・今回」、F群が「感じる・友達・学べる・発音」と出てきた。このことから、相手国のことを知ることが楽しく、英語を学ぶことで話すことが出来、英会話で聞くことにより世界の文化に興味を持ち、友だちが増え、違う言葉で通じ合うことが面白いと言った発話が出てきていることが分かった。

6. 語句の頻出度と文章関連性との考察

テキストマイニングによる、単語前後の文章から見た関連性と文章分析から、国際交流授業を通じて外国語教育だけでなく、テキストマイニング分析により、子供たちの意識が外国語はも

とより外国の文化にも関心を持ち、多様性を持った学びに対し関心度が上がったということがわかった。

4. おわりに

今回行ったアンケートの内容が誘導的になっていないか、五件法でのアンケートを取っての解析がまだできていない。アンケートの数がまだ少ない。記述式のアンケート内容に短文が多い。などの改善点もあり、今後は次年度行うアンケート結果を比較し、子どもたちの感じ方に変化があるのかなどを引き続き調査・分析を行っていく。小学6年生で今回の交流を行った児童が、翌年度に中学校であった際に、一度の交流の機会だけだったにも関わらず、自ら筆者に話しかけてきてくれて、「国際交流はとても良かった。やったことで英語に関心が持てた、ずっとやり続けて欲しい」といった内容を話し出した。一度きりの機会ではあるが、2カ月相手国とのやり取りの内容や英語での会話の練習を行い、当日の交流を迎えるのだが、限られた時間の中でも、このようにずっと心に残る授業ができたことは国際交流をやり続けている意義を感じる一面であった。

参考文献

- [1] 越中 康治, 高田 淑子, 木下 英俊, 安藤 明伸, 高橋 潔, 田幡 憲一, 岡 正明, 石澤 公明.
(2015) “テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析”―共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み―. 雑誌名宮城教育大学情報処理センター研究. P67-74. (2017年5月9日)
- [2] 横石和子. “小学校外国語活動における児童の不安が学習意欲に及ぼす作用に関する調査” ―不安に関連する諸要因に着目して―. 上越教育大学大学院提出修士論文
- [3] 吉田研作. (2009) “『中学校英語に関する基本調査』から示唆されるもの--小中連携を中心に (第1回 中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】)”. 福武書店教育研究所, ベネッセ教育研究所研究所報.
- [4] NPO 法人 Supratarka. <https://www.supratarka.org> (2020年1月11日アクセス)

著者紹介

炭村 紀子

2017年 明治大学サービス創新研究所. 客員研究員. 2018年 鳴門教育大学大学院学校教育研究科人間教育専攻修士課程在学. 2019年より大阪成蹊大学非常勤講師. 現在に至る. 初等・中等教育におけるICT支援員に関する研究に従事. 次世代大学教育研究会, 日本教育工学会, 情報コミュニケーション学会, 日本教育メディア学会各会員.